

はじめに

本書は「英語長文読解の王道 パラグラフリーディングのストラテジー① 読み方・解き方編」をすでに読破した受験生が、より実践的な問題演習を行うために書かれたものです。英文を正確に速く読むための方法論である「パラグラフリーディング」と、問題を確実に能率的に解くための方法論である「解法ストラテジー」をベースにして本編のすべての解説を行っていますから、この2つの方法論に関する理解は必要不可欠です。もしまだ『読み方・解き方編』を読んでいない皆さんには、まず『読み方・解き方編』を読破してから本書を使うことを強く勧めます。

英文を正確に速く読むことの難しさは、「豊かな語い力」や「正確な文法力」だけでなく、「論理的な読解力」まで要求される点にあります。本書は特に「論理的な読解力」の養成に主眼をおいて、本番の試験で合格点が取れる実力をつけるために以下のような工夫をこらしました。

(1) 本文をどのように読めばよいのかということの詳細に解説

ほとんどの英文読解の問題集は、語いの意味や構文の解説が載っているだけで本文の読み方に関する解説は皆無です。本書はすべての英文に関して「パラグラフリーディング解説」というパートを設けて、「本文をどのように読めばよいか」ということを詳しく説明しています。この「パラグラフリーディング解説」を熟読することによって、「自分がどこで読み間違えたか」ということが明確になり、他の英文でも誤読を減らすことにつながるのです。

(2) 本文の理解度を一目で自己検証できる論理チャートを掲載

「ある英文が読めた！」という実感を得るためには、その英文の表面的な「日本語訳」ができるだけでは不十分です。「英文のテーマ」や「筆者の主張」や「全体の論理展開」を理解できて初めて「その英文が読めた！」と言えるのです。本書は英文をどのくらい正確に読めたかを読者が自分で検証できるように、すべての英文にパラグラフの展開が一目でわかる「論理チャート」をつけています。自分の理解度を「論理チャート」と比べることによって、「どの程度まで理解できたか」という到達度が測れることになるのです。

▶下線部和訳問題の解法ストラテジー 2 ◀

文脈や論理展開を考慮して必要な箇所を意識しよう！

英文の構造分析と出題のポイントを見抜く作業が終了したら、その構造分析に基づいて語句の意味を日本語に置き換える「直訳」の作業に移ることになる。その際に直訳で不自然だったり違和感がある箇所を調整する「意識」の作業も実行すること。

具体的には、「英文全体のテーマ・筆者の最終的な主張・筆者のイイタイコト」という全体的な視点を常に念頭に置いて、下線部という部分的な語句の意味を確定することが大切である。また下線部前後の文脈や論理展開も十分に考慮して、なるべくわかりやすい自然な日本語に意識するように努めよう。個々の単語の意味は具体的な状況によって最終的な意味が決定されるということを忘れないように。

1つの単語の訳語を考える場合、自分が単語帳で覚えた意味を機械的に当てはめようとする人がいるが、そういった断片的な知識をつなぎ合わせただけで訳出できるほど、大学入試の下線部和訳問題は甘くないということを肝に銘じてもらいたい。

もちろん、意識においてもパラグラフリーディングが威力を発揮するのは言うまでもない。「抽象⇒具体」、「対比・逆接」、「因果関係」の論理パターンやさまざまな「論理マーカー」を利用して、未知の語句を類推したり、より文脈に合った訳語を選択することが重要である。また「多義語」や「意外な意味を持つ単語」が下線部に現れる場合には、その正確な意味を決定できるかどうか合否の分かれ目になることも多い。こういったことはかなりレベルの高い受験生でもなかなか実行できないところである。「下線部和訳の訳語選択はパラグラフリーディングを活用して文脈を重視する」という姿勢をくれぐれも忘れないようにしよう。

【6】

◎問題は別冊 p7

=パラグラフリーディング解説=

第①・②文の「自分に対する思い込みは間違っていることが多い」という筆者のイタイコトをまず大きくつかむことが大切。第②文の them は第①文の many things that people ... accurate を指す。how they feel about themselves は「自分自身に関してどう感じているか（ということ）」が直訳だが、要するに「自分に対する思い込み、自己評価」のこと。

第②文の「自分に対する間違った思い込み」の具体例として、第③文では「間違った劣等感を抱いている人（マイナスイメージ）」を取り上げ、それを「自分のことを正しく認識している人（プラスイメージ）」と比較していることを理解しよう。are more convinced of their beliefs than ... は「…より自分の信じることを確信している」が直訳で、この日本語は一瞬プラスイメージに感じられるが、文脈から「…より思い込みが激しい」というマイナスイメージの内容になることを読み取ることが大切。

第③文と同様に、第④文も第②文の「自分に対する間違った思い込み」の具体例である。第④文の「(FBIに追われているという被害妄想に取り憑かれた) 極端に疑い深い人 (= (b) an extremely suspicious person)」は、第③文の「間違った劣等感を抱いている人 (= (a) people who have false feelings of inferiority)」と同様に「(どんな説得に応じないほど) 思い込みが激しい」ということを理解しよう。

第⑤文の His は、第④文の an extremely suspicious person を指す。「ジブラルタルの岩山のように強固」は**比喻表現**であり、「間違った思い込みの激しさ」について、読者がより鮮明で具体的なイメージを喚起しやすいように筆者は表現を工夫しているのである。ここまで第②文から第③・④文までは典型的な「抽象⇒具体」の論理展開になっていることを確認しておこう。

第⑥文の may ... but (逆接マーカー) という「譲歩⇒逆接マーカーによる文意の逆転」の論理展開パターンに注目。筆者の力点は but 以下の「極端な劣等感や懐疑心を持つ者は、その劣等感や懐疑心に矛盾する事実にも動じないほど思い込みが激しい」という内容の方にある。

ここまでの論旨から、第⑥文の the person who has come to think of himself as inferior は、第③文の people who have false feelings of inferiority の言い換えであることは明らか。

(1) で解説した主節の主語と be 動詞の省略ではなく、前出の主節文を指す it と be 動詞の省略である。

接続詞の後に「主語 + be 動詞」が省略されると以下の 5 パターンになる。

- (1) 接続詞 + 名詞 : when a boy 「少年だった頃」
- (2) 接続詞 + 形容詞 : when young 「若かった頃」
- (3) 接続詞 + 現在分詞 : when walking 「歩いていたとき」
- (4) 接続詞 + 過去分詞 : when injured 「けがしたとき」
- (5) 接続詞 + 前置詞 + 名詞 : when in Japan 「日本にいた頃」

◆英文解釈の頻出ポイント10 would の意味

would にはさまざまな意味があるのでしっかりと区別すること。

(1) 「可能性・推量」

He left three hours ago, so he **would** be at home now.

(彼は 3 時間前に出たから、もう家に着いているだろう)

(2) 「丁寧・婉曲」

Would you open the window?

(窓を開けていただけませんか)

(3) 「過去の習慣」

I **would** often go fishing in my childhood.

(子供時代はよく釣りに行ったものだ)

(4) 「未来 (時制の一致)」

He said that he **would** come to the party.

(彼はパーティーに来ると言った)

(5) 「(否定文で) 過去の拒絶」

The door **wouldn't** open.

(ドアはどうしても開かなかった)

(6) 「仮定法」

An honest man **would** not do such a thing.

(正直者だったらそんなことはしないだろう)